

患難と教会

チャック・スミス

目次

まえがき

1. 2つの患難
2. 70週
3. 教会の携挙
4. 黙示録の書簡より
5. 抑制する力
6. ラツパ
7. 最初の復活
8. 目を覚まして、準備する
9. 終わりの時
10. 準備

「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもな
いような、ひどい苦難があるからです。」マタイ24:21

(「あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」という質問に対する
イエス様の答え。)

まえがき

50ポンドの氷の塊が空から降ってくるのを想像できますか？ 50ポンドの重さの雹の嵐のもたらせる破壊を想像することが出来ますか？ どこに隠れますか？ どうしたら安全でしょうか？ その雹は紙のようにあなたの家の屋根を突き抜けることでしょうか。あなたの自動車をつぶすことでしょうか。その雹はほとんどのものを破壊することでしょうか。このような攻撃にどうやって立つことができるでしょうか？

シエラ・ナバダ山脈が突然、海より5000フィート下にまで落ちてしまうことを想像できますか？ その峡谷のゆえに、太平洋が流れ込んでくることでしょうか。西海岸に住む人々は、どうやって逃げられるのでしょうか？ 何百万人の人々はどうなってしまうのでしょうか？

人々が死ぬことが出来ないということを想像できますか？ たとえば飛行機事故で体がめちゃくちゃなのに、霊が出て行くことを拒否してしまったらどうでしょうか。

彼らは不自由な体の状態で6ヶ月間、死を待たなければならないのです。

これらのような出来事が、この地上で近じか起こるのです。神様は、この地上に、そして神様の救いのご計画を拒否した人々に、神様の怒りを注がれます。今日、この地上で起こるべき数々の預言の成就より、この大患難時代はすぐ起こることを信じる事が出来ます。

この地に神の怒りが注がれる時、教会がここにいるのか違うのか、神学者の間で論議されてきました。多くの方が大患難時代と呼ばれる裁きの時を教会は通ると言って来ました。彼らは、神の裁きがこの地上に来る前にキリストが教会のために来るという祝福された望みは関係ないと言います。教会が逃げれることはないという考え方のゆえに、ルカの福音書21:36のイエス様が祈るように励まされたことを無意味にしています。

この本の目的は、私が大患難時代に教会がここにいらないという理由を、聖書的根拠を検証することです。

1. 2つの患難

大患難時代がこの地上に来ると言うことは、聖書の中にしっかりと見ることができます。ダニエル書12:1には、こう書いてあります。「国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書に記されている者はすべて救われる。」ここに記されている「あの書」とは、疑うことなく、「いのちの書」です。なんと言おうすばらしい救いの約束でしょうか！

マタイ24:21～22で、イエス様自身こう言っています。「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。」「選ばれた者」とは、文脈(16, 20節)を見ますとイスラエルのことです。ダニエルもイエス様も同じ「苦難の時」、この地上に来る「ひどい苦難」の日のことを話しています。

黙示録の書には、この大患難時代に起こる出来事について沢山のことが記されています。6章では、裁きの7つの封印が解かれ始めます。患難は、7つのラツパによるさばき、7つの鉢のさばきへと続きます。大患難時代について理解したければ、ここで黙示録6章から19章まで読んでください。

聖書が教える患難についてははっきりとさせることは重要なことです。二つの種類の患難が存在しています。(1)イエス様や、ダニエル、黙示録の中でヨハネが話している大患難時代。(2)教会に来るとイエス様が約束された患難。

ヨハネ16:33でイエス様は弟子たちにこう言いました。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」教会は、世にあっては患難があります。この世と、この世のシステムがサタンに支配されているため、教会が「患難」に会うと言うことに気づくことは重要なことです。すべての教会に対する攻撃の裏にはサタンがいます。

パウロは言いました。私たちの戦いは血肉に対するものではなく、主権、力、この暗闇の世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。霊的な力が神の子供たちに戦いを挑んでくれます。私たちの患難の源は、確かにサタンによって支配されているこの世のシステムです。

大患難時代の患難の源は、天から来ます。この患難時代に神の怒りが罪人の上を下るのです。黙示録6:12で第六の封印を解いた時、地上にいた人々は、隠れ、山や岩に向かって「私たちがの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの日が来たのだ。」と言います。そして彼らはこう言います。「誰がそれに耐えられよう。」黙示録11:18ではこう宣言しています。「あなたの御怒りの日が来ました。」

黙示録14:10で、大患難時代とは、神の憤りと怒りの日を示していることがわかります。封印が解かれる時、天はそれに合わせて地に裁きを下すのです。御使いたちは天の御国でトランペットが与えられ、トランペットを吹くと、天はそれに合わせて地に裁きを下すのです。御使いたちが鉢を地に向けてぶちまけると、天はそれに合わせて地に裁きを下すのです。すべてのこれらの裁きは神からで、その源も天です。詩篇69:20~28に、イエス様について預言されている箇所があります。そこに弟子たちが必要な時見捨て、渴いた時に酢を飲ませたと言う事が書かれています。そしてそれから神様が神様が打った者を迫害する者たちの上に、憤りと、燃える怒りとを注がれるように言っています。憤りは、旧約聖書の中では特に大患難時代を指して使っています。イザヤ26:19, 20; イザヤ34:1~8; エレミヤ10:10; ダニエル8:19; ダニエル11:36; ナホム1:5, 6; ゼパニヤ3:8。イザヤ66:14では、主の御手は、そのしもべたちに知られ、その憤りは敵たちに向けられると記されています。

パウロはローマ2:6で、神様はひとりひとりその人の行いに従って報いをお与えになられると言っています。忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。ヘブル10:27では、逆らう人たちに焼き尽くす激しい火が下ることを言っています。

神の子供が体験する患難は、サタンが支配する世の中から来ます。罪に満ちた世に来る患難は神様から来ます。

どうして大患難時代は来るのでしょうか？ 聖書はその目的を三つあげています。(1)地上に住む者を試みるため(黙示録3:10)(2)神の御怒りが悪者に下るため(黙示録15:7)(3)地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時(黙示録11:18)これらのうちのの一つか、すべてに当てはまる人が、大患難時代をこの地上で体験します。

旧約聖書の中で、主がアブラハムにソドムとゴモラの町が今にも裁かれることを告げる箇所があります。アブラハムは、神の公正さを持ちだして応答します。「主は公義を行う方ではありませんか。正しいものを、悪い者と一緒に滅ぼし尽くされるのですか。もしや、その町の中に50人の正しい者がいるかもしれませんか。」主は、もし50人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そうと答えられました。

分かるでしょうか。アブラハムの神へのとりなしは、神が正しい者を悪い者と一緒に裁くことは神にとって公正ではないという前提の上に成り立っています。神から行われる裁きであるのなら、正しい者を悪い者と一緒に裁くことは神にとって公正ではありません。聖書のどこにも、神から直接裁きが下るとき、正しい者が悪い者と一緒に裁かれている記事は見当たりません。

御使いたちがソドムに着いたとき、彼らはアブラハムがとりなしたたった10人の正しい人さえ見つけることが出来ませんでした。ですから、彼らは一人の正しい人、ロトを町から出して救い出しました。彼が救い出されるまで、神の裁きは来ませんでした。創世記19:22で、彼らはこう宣言しています。彼が逃れるまで彼らは何もできないと。

ルカ17章で、イエス様はロトの脱出を引用しています。イエス様ははっきりと、ロトが町から出て行ったその日に、神の裁きが下ったと指摘しています。Ⅱペテロ2章で使徒は、ソドムとゴモラ滅ぼされたのは、「みせしめ」とするためだったと。しかしながら神は、彼のまわりに住んでいる人々の行いによって悩まされていた義人ロトを救い出しました。そして、ペテロは続けてこう言っています。「主は、信仰のあつい人を試練から救い出す一方、正しくない者たちを罰し、裁きの日まで閉じ込めておくべきだと考えておられます。(新共同訳)」(Ⅱペテロ2:9)

Ⅰテサロニケ5章で、私たちは御怒りに会うように定められていないと言われています。また、ローマ5:9では、私たちはこう告げられています。「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」

教会が大患難時代を通る、この地上にやってくる神の怒りを体験するというを示すため展開されたどんな論点も、次のポイントについて説明しなければなりません。神はいつ、正しい者を悪い者と一緒に裁くという方法を変えたのでしょうか。神の怒りが注がれるのを神の子供たちに直面させることは、神のご性質を変えることです。しかし神様は、変わることはないとおっしゃられました。(マラキ3:6)

演繹的な論法、演繹法(三段論法)で知られているもっとも一般的な論法があります。この演繹法は、大前提、小前提、結論から成り立っています。もし、ひとつの前提が否定的で、もう一つが肯定的であれば、否定的な結論だけが出てきます。たとえば、大前提が肯定的だったとします。「すべての鳥は羽がある。」小前提が否定的。「犬は羽がない。」結論は否定的です。「犬は鳥ではない。」

私たちが大前提は否定的です。「教会は神の御怒り(ギリシャ語:オルゲー)に会うように定められていない。」「神の怒りから救われる」(ローマ5:9)、神は私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく」(1テサロニケ5:9)。小前提はこれです。「大患難時代は神の御怒り(オルゲー)の時です。」「山や岩に向かってこう言った。『私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。』(黙示録6:16~17)。結論は否定的で明白です。「教会は大患難時代を経験しない。」これと異なって論争することは、道理を無視することであり、犬が鳥であると証明するようなものです。教会が大患難時代を経験しないということについてこれ以上論議する必要はないと思いますが、圧倒的な証拠があります。ですから、続けましょう。

2. 70週

紀元前538年ごろ、預言者ダニエルは、神が彼のために与えられるであろう特別な命令を待っていました。ダニエルは70年間のバビロン捕囚が終わろうとしていることに気づいていました。突然、御使いガブリエルがダニエルに現れました。ダニエル書9:24で、ガブリエルはダニエルに言います。70「週」(文字通りには、“sevens”、7年の周期を表わす。)が「あなたの民(イスラエル)」と「あなたの聖なる都(エルサレム)」については定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し(幻や預言の完成、成就)、至聖所に油を注ぐためである。」御使いは続けて言います。引き上げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油注がれた者(メシヤ)、君主の来るまでが7週と62週、または、合わせて69週。それぞれの週が、7年の周期を表わすことから、69の7年周期とは、つまり483年となる。

ロバート・アンダーソンは「来るべき君」(The Coming Prince) [1] という本の中で、こう説明している。この周期はバビロンのカレンダーに準拠していて、1年間は360日である。したがって、483年は173, 880日である。紀元前445年、3月14日、ペルシャのアルタシタスタ王がネヘミヤにエルサレムを再建せよという命令を与えました。173, 880日後は、紀元後32年4月6日になります。この日、キリストはエルサレムに入城するのです。(アンダーソンの計算より [2])

ダニエルに与えた預言の最初の部分は文字通りその日に成就しました。しかし御使いは続けて言います。油注がれた者(メシヤ)は、「断たれ、彼には何も残らない。(文字通りには、彼自身のためには何も受け取ることはない)やがて来るべき君主の民が町と聖所を破壊する。」町の破壊は、紀元後70年にティトスのもとエルサレムが略奪されたときを示しています。ティトスはローマ軍の指揮官でしたが、民の君主ではありませんでした。ネロが破壊を命令した君主でした。もっとも、エルサレムが完全に陥落する前に彼は死にましたが。

エルサレムの町、そして民の聖所は御使いが宣告した通り破壊されました。そしてユダヤ人たちは散らされました。ここまで、この預言は歴史上とても正確に成就しています。しかしながら、ガブリエルは70週がイスラエルのために定められていると言いました。油注がれた者(メシヤ)は、69週の後に断たれました。それではどこに、70週目の週がいったのでしょうか。

ダニエル書9章27節で、御使いは再び「彼」という代名詞を使って「君主」について話します。「彼は1週の間、多くの者と堅い契約を結び、」69週はエルサレムを再建せよとの命令が出てからイエス・キリストが来るまでで終わります。予告されたように、メシヤは王国を受けることなく「断たれ」ました。そしてユダヤ人は離散しました。ダニエル書の70週目の最後の1週はまだ、未来なのです。

イエスはこの預言的な週をマタイ24章で言及しています。弟子たちはイエスの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのか尋ねました。15節でイエスはこう言いました。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が聖なる所に立つのを見た

ならば、(読者はよく読み取るように。)そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。」それからイエスは世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような「大患難時代」の時を予告しています。70週目の週の真中に、『荒らす憎むべき者』が登場します。

ダニエルは9章の中でこの『荒らす憎むべき者』の話をしています。民の君主は「一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者翼に現れる。ついに定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」イエスが70週目の最後の週を、彼の時代よりも未来を指して言及していましたので、反キリストはまだイスラエルと契約を結んでいないため、これはまだ未来のことであると結論づけなければなりません。事実、反キリストが7年間の契約を結ぶのならば、それが最後の7年間の期間のはじまりのしるしとなります。

7年間の契約の半分ぐらいのところで、反キリストはイスラエルとの契約を破り、神殿におけるいけにえとささげ物とをやめさせます。ダニエル書12:11によりますと、そのはっきりした日から終わりまでが1290日です。それからイエスは偉大な栄光の雲のうちに、彼の教会と共に再臨されます。パウロは言いました。「私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。」

教会時代は、ダニエルの預言の69週目と70週目の間にあてはまります。パウロによりますと、エペソ3:5でこの奥義は旧約の記者たちからは隠されていました。現在神様は、異邦人たちの上に、恵みの聖霊を注いでいます。彼の御子のため花嫁を引き寄せています。異邦人の時が満ちた時、神様は待ち焦がれた花嫁、教会を引き上げます。これを教会の携挙と一般的に呼んでいます。

[1] Sir Robert Anderson著, The Coming Prince (Grand Rapids: Kregel Publications).

[2] 日数は、次のように計算されています。紀元前445年から紀元後32年までが476年間。この年月を1年365日のユリウス暦に換算します。そうすると、173,740日になります。これに閏年や3月14日から4月6日の間の24日間の違い(ユダヤ教の慣習を含めた計算)の修正のために116日間を加えます。そうすると、合計で、173,880日となります。

3. 教会の携挙

携挙は、イエス・キリストが彼の教会をこの世から突然運び去るときに起きます。それは何の前触れもなく突然起きます。教会の携挙とイエス・キリストの再臨が完全に別のものであると、言うことに気づくことは重要なことです。携挙の時、イエスは彼の聖徒たちのために来ます。再臨の時、教会はイエス・キリストとともに戻ってきます。ユダ14にはこう書いてあります。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」

コリント人への手紙 第一15章51節から52節で、パウロはこう言っています。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。(大変貌があります。体が変わります。)終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちです。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」すべてが終わるまで、何が起きているか気づきもしないことでしょう。突然あなたは、すべての教会とともに、栄光の体でイエスの臨在の中にいるでしょう。

私たち、教会は、変えられます。パウロはピリピ人たちにこう書きました。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」(ピリピ3:20~21)この大変貌を説明するためにパウロはコリントにこう書きました。「朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。」(Iコリント15:53)

テサロニケの人々にパウロはこう言いました。「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」(Iテサロニケ4:16~18)

ある人々は教会の携挙の概念やアイデアをあざけります。彼らは「携挙」という言葉が聖書の中に見つからないと主張します。それは、どの訳の聖書をあなたが読んでいるかということにすべてが関わっています。

Iテサロニケ4:17の「引き上げられ」という言葉は、ギリシャ語でハルパゾー(HARPAZO)と言う言葉が使われています。「激しい力(violent force)によって運び去る」という意味があります。ハルパゾーのラテン語の同義語がラピオ(RAPIO)「力によって取り去る」という動詞です。現存する最も古い聖書の一つであるラテン語のウルガタ訳聖書の中では、17節では適切な時制のラピオが使われています。ラプトウス(RAPTUS)は、ラピオの過去分詞です。そして、私たちの英語の携挙(ラプチャー《rapture》)の語幹ラプト(RAPT)はこの過去分詞からきてい

ます。携挙(ラプチャー《rapture》)という言葉が英欽定訳(KJV)に出てこなくても、ラテン語のウルガタ訳にはそのもとになっている言葉があります。

携挙の時に限っては、イエスは、「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。」と言われました。私たちにとって、携挙の日や時を推定して宣言するのは聖書的でない推測です。もし私たちが、その時を知っていると言うのなら、私たちは地上にいたときのキリストよりも自分のほうが良く知っていると言っていることになります。

私たちは携挙の正確な時を知らませんが、I テサロニケ5章でパウロはこう言っています。「兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのよようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。しかし、兄弟たち。あなたがたは暗闇の中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。」(1~4節) 聖書は教会の携挙はあなたが驚くようには来ないと言っています。

神様は、イエス・キリストが来られる前にいくつかのしるしを与えてくださいました。素晴らしいしるしの一つは、イスラエルという国の復国です。何年間も聖書学者たちは沢山の聖書箇所(マタイ24:32を含む)にもとづいて、不変(たとえの中の一ちじくの木や一ちじくは、イスラエルの国を象徴している)な釈義の適用としてイスラエルの人々が再び集められることを期待して待ちました。懐疑論者は、この預言を嘲笑しました。過去の国が再び復国するなど歴史上ありえないことでした。しかし、奇跡が起きました。復国したのです。神様は地上の国々の中からイスラエルを復国させたのです。神様は約束を成就させました。

詩篇102:16には、こう宣言されています。「主はシオンを建て、その栄光のうちに現われ、」主がシオンを建てられるので、正統的ユダヤ人は今日、メシヤを探しています。私たちもです。私たちも神様の約束の成就 — 偉大な神であり、救い主であるイエス・キリストが再び来られる — を期待して待っているのです。

教会が携挙された後、神様はもう一度選びの民であるイスラエルの国を取り扱われます。神様は、旧約聖書の中のイスラエルに関する沢山の約束、預言を成就させます。ダニエルの70週目もです。したがって、もう一つの7年の周期はイスラエルの歴史の中で成就するのです。エレミヤはそれを「ヤコブの苦難の時」と呼んでいます。イスラエルは大患難時代の間、神によって印を押された14万4千人のユダヤ人のように神の守りの力を体験することでしょう。彼らは部分的にさばきから守られるでしょう。(黙示録7:3, 9:4)

4. 黙示録の書簡より

黙示録の書は、三つの部分に分けることができます。黙示録1:19で御使いは、ヨハネに見たこと、今あること、この後に起こることを書き記せといわれました。ギリシャ語で「この後に」は、「メタ・タウタ」です。1章では、ヨハネは自分が見た幻について書きました。復活された栄光のキリストが、七つの星を右手に持ち、七つの金の燭台の真中に立っていました。2章と3章では、ヨハネは今あることについて書きました。イエス・キリストのアジアの七つの教会(教会史の七つの時代もあらわしている)に対する使信。

4章は、黙示録の三つ目の部分にあたります。この章は、同じギリシャ語の言葉で始まります。「メタ・タウタ」「この後に」。質問が自然と湧き上がります。「何の後に？」明らかな答えは、「2章と3章の後」です。教会のことです。ですから、あなたは黙示録4:1をこう始めることができます。「教会の時代の後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラツパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後(「メタ・タウタ」「この後に」)、必ず起こることをあなたに示そう。」これが教会の携挙をさせていると私は信じています。ラツパのような声で聖徒たちにここに上れと呼びかけるのです。パウロも教会の携挙に伴って神のラツパのことを話しています。テサロニケ人への手紙第一4:16、コリント人への手紙第一15:52

天に一つの開いた門は私たちを、忠実で真実な終わりの日の残りの民であるフィラデルフィア教会に対するイエス様のメッセージへとつれもどします。彼は言いました。「わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。」今、このドアは天に開かれ、そしてラツパのような声で呼びかけます。

テアテラの教会へのメッセージは、この教会の1部分が大患難時代を通ることが警告されています。イエス様は彼らには非難すべきことがあると言います。彼らがイゼベルという女をなすがままにさせて、キリストのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行わせ、偶像の神にささげた物を食べさせていると。イエス様は悔い改める機会を彼女に与えたけれども、彼女は不品行を悔い改めようとしません。したがってイエス様はこの女を病の床に投げ込み、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もうと。

ここでは明確に悔い改めなければ大患難時代に直面することを警告しています。はっきりしていることは、もし悔い改めるのならば、大患難時代を逃れることができるということです。

黙示録3:10で、主はフィラデルフィアの教会にこう言っています。「あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」これは教会が大患難時代を通らないということの明確な約束です。私は教会の1部分が大患難時代に直面することに同意しなければなりません。霊的な不品行から立ちかえることなく、悔い改めなかったテアテラの教会は携挙を逃し、大患難時代を通ることでしょう。

黙示録の4章には神の御座についての説明が私たちに与えられています。御座の回りには24人の長老たちが座っていました。また、生き物、ケルビムがいました。私たちはまた、天の神への賛美と礼拝もまた見る事が出来ます。

5章では7つの封印で封じられている内側にも外側にも文字が書き記された巻き物を見ます。ひとりの御使いが大声でふれ広めて言います。「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」巻き物を開くにも、見るにも、ふさわしい者が誰も見つからなかったので、ヨハネが激しく泣いたのを私たちは見る事が出来ます。私たちは長老のひとりが、ヨハネに、「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことが出来ます。」と言ったことを聞きます。それからイエス様(ユダ族から出たしし)がほふほふられたと見える小羊として進みます。彼は、父なる神の右の手から、巻き物を受け取ります。それから私たちは天の贖れた者たちの歌を聞きます。彼らは新しい歌を歌います。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」

ある学者たちは、この歌の歌詞は、「あなたはほふられて、その血により、神のために人々を贖い」とすべきだと言います。古い写本のうち、たった5つの写本だけ、アレキサンドリアからの写本だけ、「私たちを」ではなく「彼らを」となっています。しかし1000以上の多くの古い写本は、英欽定訳(KJV)が訳したように記されています。ですから、この箇所は正しくは「神のために私たちが贖い」なのです。

誰がイエス・キリストの血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、贖いの歌を歌うことが出来るのでしょうか？はっきりしています、たった一つのグループだけが歌うことが出来ます。教会です。ルカの福音書21章で、イエス様が弟子たちに再び来られるときのしるしについて分かち合っているとき、イエス様が戻ってくる前に大患難時代が来ることを話しました。それからこう言いました。「やがて起ころうとしているこれらすべてのことからののがれ、(大患難時代に起こることから逃れるため。)人の子の前に立つことが出来るように、いつも油断せずに祈っていなさい。」黙示録5章でこれが私たちが分かることです。天で、教会は人の子、神の小羊の前に立つのです。

教会が巻物の第一の封印が解かれる前に神の御座の前で歌っていることには意味があります。教会は大患難時代が始まる前に天で歌っているのです。集まりとしての教会は、この後黙示録19章で白い馬に乗ってイエス・キリストが地に戻ってくるまで、黙示録の中の地上には登場しません。

7章の大患難時代を抜け出てきた天にいるグループは、教会ではありません。長老のひとりがヨハネに「この人たちは、いったいだれですか。」と尋ねたとき、彼は彼らが分かりませんでした。彼らの立場は教会のものとは同じではなかったからです。教会がキリストと共に治める栄光の望みを歌っているときに、このグループは聖所で昼も夜も、神に仕えていました。

黙示録の13章には、「聖徒たちに戦いをいどむ」罪の人の来ることが記されている。これらの「聖徒たち」も教会ではありません。なぜならば、この罪の人は彼らに打ち勝つからです。

ダニエルもまた、この事実について証しています。ダニエル7:21では反キリストは「角」として描写されています。しかしながらイエス様はマタイ16:18で、彼の教会はハデスの門も教会に打ち勝てないと言いました。ですから、反キリストが教会に打ち勝つことは出来ませんので、黙示録13章とダニエル書7章の聖徒たちは、教会ということは不可能です。

これは別の三段論法です。否定そして肯定的前提、それは否定的な結論しか出てきません。大前提:ハデスの門も教会に打ち勝てない。小前提:聖徒たちは反キリストによって打ち破られる。結論:聖徒たちは教会ではない。ですから聖徒たちはイスラエルにちがひありません。マタイ24:31の選びの民と同じです。

5. 抑制する力

テサロニケ人への手紙第二で使徒パウロは、教会にそっと入り込んできた間違いを正すために書きました。ある偽教師たちは主の日がすでに来たと言っていました。パウロはテサロニケの人々に「その日」、この地を治めるためにイエス・キリストが再び来られる日、について言いました。背教が起こり、罪の人、すなわち滅びの子が現れなければ主の日は来ないと言ったのです。パウロは、彼がまだ彼らのところにいたとき、これらのことをよく彼らに話していたことを思い出させます。

2章でパウロはこう言っています。「あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現れるようにと、いま引き止めているものがあります。不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」

誰が反キリストが現れるのを引き止める者でしょうか？私はこの引き止める力は教会の中でそして教会を通して働かされている聖霊の力と信じています。この地に聖霊に満たされた教会が存在しつづけるかぎり、反キリストが現れるのは引き止められ続けるでしょう。教会が取り去られるとき、反キリストを妨げるものは何もなくなるでしょう。それから彼は世界の政府をのつとることでしょう。

聖霊は遍在される方ですから、この世から取り去られるわけではありません。しかし、このとき彼はイスラエルの上に注がれることでしょう。

エゼキエル39:29で、神様がロシアの軍隊を滅ぼすとき、イスラエルの国に聖霊を注ぐと言っています。この出来事は、イスラエルに定められた最後の7週のはじめのしるしとなることでしょう。

私はどう一緒になるか、全体像がよく見えます。教会が取り去られた後に、反キリストが現れます。黙示録6章で、7つの封印を解いて最初に起きる出来事は白い馬がそれに乗っている者が出て行ったことでした。これは、反キリストが地上に現れることです。教会は取り去られ、天で主と共に喜んでいきますから、この悪しき者がこの世をのつとることを抑制するものはないのです。

6. ラッパ

教会が大患難時代を通り、地上に訪れる神の怒りに直面すると教える人々は、コリント人第一の手紙15章の最後のラッパと、黙示録の7つめのラッパを同一視しています。私はこれらの二つのラッパを並行させることに困難を覚えます。

まず第一に、テサロニケ人への手紙第一4:16の教会の携挙の時に響くラッパは、「神のラッパ」と呼ばれています。黙示録の7つめのラッパは、7つめの御使いのラッパです。

コリント人への手紙第一15章のラッパは、「終わりのラッパと共に、たちまち、一瞬のうちに」起こる出来事の宣言のために用いられます。しかしながら、黙示録の7つめのラッパはある一定期間を網羅しています。10章7節はこう言っています。「第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日(複数形)には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」

コリント人への手紙第一15章とテサロニケ人への手紙第一4章の最後のラッパは栄光のラッパです。私たちは彼の似姿へと変えられ、引き上げられ空中で主とお会いするのです。しかしながら、黙示録の7つめのラッパは、災いの継続についてのものです。黙示録8:13で、御使いはこう言います。「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」この御使いは、4つめのラッパの後にこれを言いました。ですから、3つの「わざわい」は、5、6、7つめのラッパです。5つめのラッパの後に(黙示録9:12)、御使いは言います。「第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。」これは、6、7つめのラッパを指しています。黙示録11:14で、御使いは言います。「第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る。」それから、15節に行きますと、7つめのラッパ、実際は3つめのわざわいになっているのです。

教会の携挙やキリストの栄光の似姿に変えられることは災いから遠いものです。もし私が行けなかった場合のみ災いです。したがって、私は黙示録15の7つめのラッパと、コリント人への手紙第一15章の最後のラッパを同じとすることに大きな問題を感じるのです。なぜならば、結果と時間があまりにも違うからです。ディーン・ヘンリー・アルフォードは、その新約聖書のギリシャ語注解書[1]の中でコリント人への手紙第一15章52節をこう解説しています。この最後のラッパが黙示録の7つ目のラッパであるということを定義する理由はどこにも存在していない。彼はまたこう言っています。コリント人への手紙第一15章の最後のラッパの後に、ラッパがないとみなす理由はどこにもない。

[1] Henry Alford著, Alford's Greek Testament (Grand Rapids: Guardian Press).

7. 最初の復活

教会が大患難時代を通ると教える教会によってよく引用されるもう一つの箇所は黙示録20:4～5です。ヨハネは言いました。「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。その他の死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。」

ここでの論点は、「第一の復活」の意味です。彼らは、これより前に復活はないと言います。第一の意味は、第一ですから、それよりも前とは考えられないというのです。しかしながら、黙示録20章の、サタンが縛られ底知れぬ所に投げ込まれ1000年の間閉じ込められるという出来事の後、すべての第一の復活が起こるとすると、あなたは、次のことを説明する必要があります。どうして、イエス様は「眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と聖書は言っているのでしょうか。イエス様は、すでによみがえったのではないのでしょうか。

また、黙示録7章で、天の大勢の群集はこう叫んでいます。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」長老のひとりがヨハネに尋ねました。「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか。」ヨハネは、わかりませんと答えました。すると長老は答えました。「彼らは、大きな患難から抜け出てきた者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。だから彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。」この7章の天の大勢の群集は、大患難時代から抜け出てきた者たちです。したがって、黙示録20章の前に、よみがえっているのです。

黙示録15章で、私たちは天にあるもうひとつの集団を見ることが出来ます。ヨハネはこう表現しています。「私は、火の混じった、ガラスの海のようなものを見た。」そして彼は、獣と、像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々を見たというのです。彼らは神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていたのです。彼らは神のしもべモーセの歌を歌っていました。ですから、彼らは獣に勝利したイスラエルの贖われた人たちです。ヨハネは7つの神の怒りの鉢を地に向けてぶちまける前に彼らを天で見たのです。

ここには、天では2つのよみがえった集団を見ることが出来ます。彼らは第一の復活の一部です。黙示録20章の前、ヨハネはイエス様の証のため先立った人々を見たとき、「第一の復活」に言及しました。

黙示録20:4で、ヨハネは2つの違う区別された集団を見ます。まず始めに、彼は多くの座と、その上に座った人々を見ました。彼らはさばきを行う権威が与えられました。疑うことなくこれは教会です。主は、ラオデキアにある教会に、勝利を得る者は、わたしとともにわたしの座につかせようといわれました。(3:21)ヨハネは黙示録20:4で、二つ目の集団を見ます。彼らはイ

エスのあかしのと神のことばのゆえに・・・人たち。彼らは完全に違った集団です。一つはさばきの座につき、もう一つは、大患難時代から取り出されたもの、反キリストの力から救い出され、彼の支配に委ねなかった者たち。

第一の復活は、ある一定期間に起こります。教会がこの時期の神の怒りを経験すると主張する人々は、第一の復活は終わりの日の復活と言います。彼らは文字通り24時間を主張します。第一の復活は、実際は、一定期間を含み、沢山の違った出来事を包含しています。イエス様が死からよみがえったときに、よみがえった人々がいました。(マタイ27:52)イエス様が来て空中で会うときに、キリストともに来る人々がいます。(Iテサロニケ4:14)そして、イエス・キリストの証のゆえに殉教する人々がいて、彼らは大患難時代の間によみがえるのです。彼らはすべて第一の復活の部分なのです。第一の復活は第二の復活と反対に存在しています。第二の復活は、不義を行う者たちの復活で、神の偉大な白い御座の前に立つのです。

8. 目を覚まして準備する

イエス様はいつの時代の彼の弟子たちや教会に、いかなる時でもイエス様が再び来られることを予期するように意図されたことは明確です。彼の弟子たちに対するみことばは、目を覚まして準備していなさいということでした。なぜならば、イエス様が来られるその日、その時を知る事は無いからです。イエス様は期待しないときに来られるからです。したがって、彼らはいつとも目を覚まして準備していなければならないのです。

もし教会が大患難時代を通らなければならないというのならば、あなたはイエス・キリストの再臨の緊急性を取り去るのです。教会は目を覚ましつづけなくなるでしょう。もし、私たちがまず大患難時代を通らなければならないというのならば、私たちが目を覚ます必要がなくなってしまいます。このような場合、私たちは大患難時代や反キリストが現れるのを目を覚まして注意しているということになります。そうすると、教会は沢山のことを注意する事になります。実際私たちは、終末の出来事を注意深く見ていく必要があります。

最初の大きな出来事は、反キリストが現れる事です。彼は彼の支配を確立させ、彼の新しい貨幣制度を設立します。そしてクリスチャンは買ったり売ったりしなくても生きていけるように工夫しなければならなくなるのです。次に、私たちは地上に訪れる予告された大きな裁きを注意しなければなりません。私たちは特に、反キリストが再建された神殿の至聖所に立つのを注意しなければなりません。彼は自分を神と言い、日ごとのいけにえや祈りをやめさせます。ダニエルによりますと、私たちはそれから主が再臨されるまで、1290日であるということがわかります。(ダニエル12:11)

聖書は誰もその日その時を知らないといえます。ですからこれはキリストが再臨して地上を治める日を指すことは出来ません。なぜならば、ダニエルの預言によってはっきりとした日が私たちに与えられているからです。主が来て彼の教会を取り去るその日その時は誰も知りません。したがって私たちは目を覚ましていなければならないのです。大患難時代や反キリストが現れるのを注意するためではなく、私たちのためにイエス・キリストがいつきても良いように！

マタイ24:42でイエス様は連続したたとえ話によって目を覚まして準備しているように勧めています。

最初のたとえは家の主人に関する寓話です。もし家の主人が、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入れさせはしないだろうと。「だから」イエス様は言いました。「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。(新共同訳)」

それからイエス様は、忠実で賢いしもべのたとえをしました。彼の主人が彼のしもべたちを任せて、主人が帰ってきたときにそのようにしているのを見られるということは、準備をして目を覚ましていているということです。

イエス様は悪いしもべについて警告しています。悪いしもべは心の中でこう思います。「主人はまだまだ帰るまい。」携拳が大患難時代や反キリストが現れた後でなければ起こらないとあなたが教えるのならば、あなたは主が来ることが遅れると言っているのです。反キリストが現れるまでとか、大患難時代が終わるまでとか。

イエス様はこのような信仰がこのしもべのたとえをとおして怠惰に導かれることを警告しました。主人はしもべが思いがけない時に帰って来ました。このしもべは彼の報いを未信者たちと同じく与えられました。この全体的な概念は、主が来られるのに、目を覚まして準備していて欲しいという事です。大患難時代やその始まり、反キリストが現れることとかではありません。

イエス・キリストがいつ来ても良いように目を覚ましていなければなりません。キリストが教会のために来られる前にどんな出来事でも置くのならば、その出来事が起こった後まで遅れると言っているのです。これを教えることはとても危険なことであり、イエス様自身が警告したことです。

マタイ25章全体を通じて、イエス様は準備することの必要性を強調しています。十人の娘のたとえで、五人の愚かな娘は主人が来た時準備が出来ていませんでした。「そら、花婿だ。迎えに出よ。」という叫ぶ声に、準備していた娘たちは行くことができました。13節でイエス様はこう言っています。「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」

私たちはキリストが来られるのは緊急であると確信しています。教会が携拳される前にたった一つの預言さえも成就しないと信じています。そしてイエス様は、どの世代の教会にもイエス様が再び来られるのを目を覚まして待っているようにされました。マルコ13:35~37で、イエス様はこう言われました。「だから、目をさましていなさい。家の主人がいつ帰って来るか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、わからないからです。主人が不意に帰って来たとき眠っているのを見られないようになさい。わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい。」

9. 終わりの時

主は私たちに、大患難時代と教会に関連してすばらしい約束を与えて下さっています。最初の約束は、黙示録3:10の彼の忠実なフィラデルフィア教会に与えられたものです。「あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」この節を解釈するうえで、イエス様が「大患難時代」の中で私たちを守り、神様がこの時代を通りぬけることができるように守ってくださることを意味しているというものは、聖書的ではないですし、学問的にも欠けています。このような解釈は、あらかじめ持っている見解に合わせるために、ないものを聖書の中に読み込んでいるのです。黙示録のどこにも神様の教会に対する特別な守りについて語っていないのです。たった14万4千人の印を押された(それなので裁きのある部分が来た時に、それらから守られます。)イスラエルの人々だけが、神様の特別な守りを体験するのです。また、12章に登場するひとりの女もわしの翼が与えられて、竜の怒りからのがれ、荒野で3年半の間守られます。

テサロニケ人への手紙第一5:9で、パウロは教会のためにキリストが来られることについて書いています。「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。」イエス様が私の罪のためにさばきを完全に背負われた後で、神様が私を悪い世と一緒に裁かれるということは、神様のご性質としては適当ではありません。神様の怒りと裁きはキリストを拒絶した世界に注がれるのです。神の子として、どうして神様は私を不義な者の一人として数えるのでしょうか？神様は私たちを御怒りに会うようにお定めになったわけではありません。

別の興味深い約束は、イザヤ26:19~21に見る事が出来ます。主はまず死者の復活について話をします。それからこう言います。「さあ、わが民よ。あなたの部屋に入り、うしろの戸を閉じよ。憤りの過ぎるまで、ほんのしばらく、身を隠せ。見よ。主はご自分の住まいから出て来て、地に住む者の罪を罰せられるからだ。地はその上に流された血を現わし、その上で殺された者たちを、もう、おおうことをしない。」

イザヤは主が地に住むものを裁くために来られる日、大患難時代の時を預言しているのです。しかし神様は彼の民を彼の部屋に入り、うしろの戸を閉じよと招待します。憤りの過ぎるまで、大患難時代が終わるまで、隠されるために。

これはユダヤ人をさしているのかもしれませんが。彼らはペトラという岩の町に逃げ、大患難時代から守られます。イザヤもまたこの事について16章で言っています。「あなたの中にわたしの散らされた者を宿らせよ、モアブよ。荒らす者から逃れて来る者の隠れ家となれ。虐げるものが死に、破壊も終わり、踏みつける者が地から消えうせるとき、一つの王座が恵みによって堅く立てられ、さばきをなし、公正を求め、正義をすみやかに行なう者が、ダビデの天幕で、真実をもって、そこにすわる。(英訳)」

ここではモアブの人々はユダヤ人をセラ、ペトラで、反キリストがユダヤ人を滅ぼそうとする間かくまうように言っています。もしこの守るという約束が教会でなくユダヤ人を指しているのだとすれば、どうして主はユダヤ人を守って、教会を大患難時代から守られないことがあるでしょうか。

もし、主が教会を大患難時代から守られると計画されているとするのなら、どこにその約束が書かれているでしょうか？聖書のどこに教会が印をつけられ、大患難時代の間守られると書いてあるでしょうか？黙示録で、終わりの日の出来事をはっきりと記したように、大患難時代における教会の守りが記されているでしょうか？

ルカ21章で、イエス様は大患難時代とご自身の再臨について話しています。「あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈みこんでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。その日は、全地の表に住むすべての人に臨臨むからです。」そして、再度忠告します。「あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことが出来るように、いつも油断せずに祈っていなさい。」

「これらすべてのことからのがれ」の「これら」とは何でしょうか？もちろん、私は主が教会のために来られることからのがれたくありません。イエス様は、やって来る大患難時代を指しているのです。そして、私もそれからのがれたいのです。私は、イエス様が教えられたように、目を覚まして祈っています。「これらの大患難時代からのがれ、人の子の御前に立つのにふさわしいものとなる事が出来ますように。」

黙示録5章にあるように、イエス様が御座に座し、巻物を右手に持たれる時、私は神の御座の前に大群衆とともに立つのを期待しています。私は、封印が解かれ、神の怒りと憤りが、キリストを拒絶したこの世界に注がれる時、この地にいることを期待していません。このことが、キリストを信じる者にとってキリストが再び来られる事が祝福された望みとなるのです。私たちは心からこの祝福された望みを待ち望みます。大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを。旧約聖書は地上に神によって裁きを下る話が2つ私たちに与えられています。ノアの日の洪水と、ロトの時にソドムを滅ぼした火と硫黄です。イエス様はイエス様が再び来られる時は、これらの時と似ていると言われました。「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。(マタイ24:37)」また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。(ルカ17:28, 29)」両方の場合とも、義人は神の裁きが来る前に救われました。ノアは、神によって印をつけられた144,000人の型です。方舟の中で、裁きから守られました。ロトの方は、教会の型です。裁きから救い出されました。私たちはまた、ダニエル書の3人の燃える炉から守られた少年の場合もあります。問題は、「ダニエルはどこにいたか？」ということです。彼は、ネブカデネザルの偶像に礼拝したのでしょうか？そうは思いません。彼は奇跡的に守られたのです。ネブカデネザルのイメージは、黙示録13章の獣のイメージの型と多くの人々は信じています。3

人のヘブル人の少年たちは、大患難時代に守られる忠実なイスラエルの型で、ダニエルは大患難時代から守られる教会の型です。

携拳が伝統的で歴史的な教会の教えではないと議論される方に一言言わせてください。もし私たちが伝統的な教会史を見るならば、新約聖書の中の教会も歴史的な教会と考えるのであれば、聖書ははっきりと初代教会はイエス・キリストがすぐ戻ってくることを待ち望んでいたことが分かります。初代教会のクリスチャンたちは、イエス様が彼らのためにいつでも来られることを期待していました。テサロニケ人への手紙第一4章で、テサロニケの信徒たちが、主の再臨の前に召された愛する者たちが神の国の時代にあずかれないのではと考え、悲しんでいたことが分かります。

パウロはピリピの人々に言いました。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」確かに、教会史の中で、特に暗黒時代の間に主の再臨の期待は衰えていってしまいました。

何よりも、私は多くの歴史的な教会の教えに賛成できないものがあります。歴史的な教会の教えは、赤ん坊に洗礼を授けるように教えます。私は赤ん坊に洗礼を授けるように聖書が教えているとは思えません。歴史的な教会は、マリアや死んだ聖徒たちのとりなしを教えます。私は聖書が死んだ聖徒たちやマリアのとりなしを教えているとは思えません。歴史的な教会は、教皇の不可謬性を教えます。私は教皇の不可謬性を信じません。歴史的な教会の教えの中には多くの聖書的でない、賛成できないものがあるのです。私は歴史的な教会の教えのすべての形式や概念が正しいとは見ていませんし、歴史的な教会が私たちが実践したり従うモデルとは考えていません。唯一の正しいモデルは「使徒の働き」の中に見つけることができます。ヨハネが黙示録を書いた時点で、沢山の間違っただけの教えが忍び込んでいて、イエス様は悔い改めるように教会に何度も呼びかけています。黙示録2, 3。

この携拳という関心や教えはプリマス同胞集会から出たという主張があります。イングランドでの集会で、ある女性が預言の賜物をもって、教会を励ましてこう言ったそうです。主は彼の教会を取り去り、来るべき御怒りから救うと。私たちはダービーやスコフィールドのような人たちから言われて、この見解が一般的になったと。

ダニエル書12章で、預言者が終わりの時代に関して神様からの理解を求めていますと、主は、ダニエルにこう言います。「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」ダニエル書12章の文脈の中で、知識を増そうということは、この預言の真理は終わりの時まで封じられているということです。

主が主の教会をこの世から取り去るその日が近づくとつれて、主は私たちがもっと大患難時代の前に教会が取り去られるという約束に気がつかせるようにされているのではないのでしょうか。どうして主はルター、カルビン、またほかの改革派教会の指導者たちにこれらのことを現されたのでしょうか？彼らは教会が取り去られる時に生きていなかったのです。

ダニエル書は、終わりの時まで封じられていると、そして私たちはその時にいます。ダニエル12:4は、確かに知識が増すという事を約束しています。神様は私たちに主の約束の理解について、そして私たちが生きるこれらの日についての主のみことばについての新しい洞察を与えていると考えるのが正しいと思います。

私は教会の携挙を信じているリベラル教会の神学者を知りません。しかしながら、世界中の福音派の大多数のクリスチャンたちによってこの希望は握られています。なぜならば私たちは真実にイエス・キリストが来られることが近いことを信じ、そして、この悪の世のシステムから私たちをいつでも取り去る主を待ち望んでいるからです。

そうなりますように。すぐ来て下さい。主イエスよ！

10. 準備

主が今日にも来られるかもしれないという事実の中で、クリスチャンとして私たちはどうしたらよいでしょうか。

第一番目に、あなたがすべきでないことを言わせてください。仕事を辞めないで下さい。家を売らないで下さい。返済しなくても大丈夫と考えてお金をいくら借りられるかなどと考えるしないで下さい。イエス様は言われました。「私が帰るまで、これで商売しなさい。」(ルカ19:13)イエス様は私たちがしっかりと働きつづけるようにされました。ノアもロトも神様が救われたその日までいつものように仕事をしていました。

イエス様は言いました。「目を覚ましていなさい。」(マタイ24:42)あなたは、目を覚ましているべきです。聖書は言います。「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられました。二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。(ヘブル9:28)」あなたは、準備ができているべきです。イエス様は言われました。「だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。(マタイ24:44)」アモスは叫びました。「あなたの神に会う備えをせよ。」あなたは、備えなければなりません。イエス・キリストにあなたの心と人生をささげることを通して、イエス様の赦しとあなたの罪と咎をぬぐい去って下さったことを受けとめることを通して、備えるのです。そうして、待つのです。ヤコブは言いました。「こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。(ヤコブ5:7~8)」ペテロの手紙第二3:3~4では、終わりの日に、あざける者がやってきて「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。」と言うと言っています。しかし、「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」(9節)

時として、イエス・キリストの来臨に関して私たちの心の中にためらいがあります。なぜならば、イエス様 came されたとき、私たちの救われていない家族にどんなことが起こるかと言うことです。

私たちが携挙されれば、私たちの証によって議論し、私たちの証を怒っていた私たちの愛する人々が、教会の携挙の機会を逃したことに気がつくことでしょう。その結果、彼らは神様にとっても真剣になって、獣の刻印を拒否することによって大患難時代に殉教することを選ぶことでしょう。彼らは刻印よりも死を選び、救われます。(黙示録20:4)テサロニケ人への手紙第二のパウロの教えのゆえに、ある人々は、今真理を拒絶した人が、その時信じるができるとは考えにくいと言います。これは分からないことではありますが、私ならば自分の永遠を分からない状態にしておきたいありません。確かにしておきたいものです。

黙示録7:9~14で、ヨハネは天を見ました。「あらゆる国民、部族・・・のうちから、だれにも数えきれぬほどの大勢の群集が、白い衣を着、」救いの歌を歌っているのを見ました。この大勢

の群集に関して長老の一人がヨハネに言いました。「彼らは、大きな患難から抜け出てきた者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」黙示録6:9～11で、第五の封印を解いた時に、大患難時代の間にも殉教した魂が天の場面に入る機会を待っています。

大患難時代の聖徒になることは、とても大変なことです。イエス様は言われました。「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、『ひどい苦難』があるからです。(マタイ24:21)」どうして待つのですか？イエス様が教会を携挙する時に主とともになれる栄光のわくわくするような出来事を知っていながら、どうしてあなたはそのチャンスを逃すのですか？

ここでの質問は、「あなたは準備ができていますか？」です。主が今日宣言されていることを考えてください。「これが教会の最後の時です。あなたはあなたの証を終えました。帰って来なさい。」あなたは教会とともに集められ、空中で主と会うでしょうか？それとも、この地上で頭をかいて、何が起きているのだらうと考えるでしょうか？

残されて大患難時代に直面し、地上に来る全ての恐怖を体験することよりも、教会とともに行く方がどんなに良いことでしょうか。どうして主があなたのために簡単にしているのに、自分で大変にしているのですか。どうしてただあなたの心と人生を今イエス様に開かないのですか。どうしてただイエス様をあなたの主、救い主として受け入れ、主が言われたように準備しないのですか？あなたが準備するために何が必要ですか？イエス・キリストがあなたの心とあなたの人生に住むことです。なぜならもしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。